
死とぬるま湯の俺

かまたかま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死とぬるま湯の俺

【Nコード】

N3203P

【作者名】

かまたかま

【あらすじ】

ただただ、分からない事だらけの世界だなあ。

暖かい毛布の中、俺はゆっくりと目を閉じる。

感情はいつだって曖昧なままでその境界は見えない。怒りと悲しみが同居する時もあれば、笑顔と涙がひとつになる事だってある。

昨日、親戚の人が死んだ。

電話口で聞いたその事実には俺は驚いた。間抜けな声を出し、恐らく目を見開いて。

そう、俺は驚いたのだ。嘆いて涙を流す訳でも無く、呑気に飯を食っていた自分を恥じるでもなく。

俺は寝返りを打つ。

その人は俺より少し年上の男性で、子供の頃は良く遊びに連れて行って貰った。今思えば良く分からないが、何故か毎回ボーリングに連れて行ってくれ、とせがんだ気がする。まだ子供で力の弱かった俺は七ポンドの球を投げ、彼は十二ポンドの球を投げていた。さつき思い出した。

俺は寝返りを打つ。

その話を聞いてもう半日。未だに涙も、悲しみも感じない。ただ、少しの体のたるさがある。眠気は来ない。

死とは何だろう。この世から消える事。命を枯らす事。絶望する事。

たかだか半日考えた程度で分ければ苦労は無い。きっと人類も平和になるだろう。いつもと変わらない天井。

ぼんやりと頭に浮かぶ。故郷の草の生えた裏道。空はいつだって白い雲と晴れた青空。そこを歩く子供は自分だろうか。いや、違う。多分知らない人間だ。

毛布を手繰り寄せる。どうにもやる気が出ない。動く力というか、カロリーとは別のエネルギーが足りない。何か一つ後押しがあれば動ける。でもまだ動けない。

ゴミ箱にはゴミが入っている。当然だ。そろそろ捨てないと。ゴミ箱からゴミ袋へ、ゴミ袋から回収車へ。ゴミは流れるように捨てるべきだ。

そう、全ては流れるようにあるべきだ。血の流れは心臓からポンプで押し出すし、命は土へ還る。水垢のついた浴槽の水は渦になって消えていく。

そういえばブラウン管のテレビも捨てなくては。使えなくなった訳ではないが、もうリビングには液晶の薄型テレビがある。

全ては流れるように。

俺は寝返りを打つ。

死んだあの人は去年結婚した。結婚式に出席したが、酒で赤くなつた顔は幸せそうな笑顔だった。洋式の結婚式場。柄にもなく歌を歌った俺に「ありがとう」とはにかみながら言っていた。俺の親、あの人の親。友達。沢山の人が居て、それぞれが笑顔だった。

あの人は、自殺した。

自分を殺す。そこに何が見えたのか。もしくは何もなかったから死んだのか。どうやって死んだのかは訊いていない。ただ、自殺、とだけ訊いた。

やっぱり死は冷たいのだろうか。そこに意味のあるものなのだろうか。

きっと今この瞬間に、冷たいメスで検死されているだろうあの人のぬるま湯のような布団にくるまる俺。どちらが天国でどちらが地獄か。

あるいは。

考えても仕方がない事だが、考えてしまふ。悲しみと命。

さっき会った友人に「親戚が死んだ」と言った時、俺の表情は悲しみ一つ無かったと思う。むしろ冗談すら言っていた。笑い声と笑い声。死んだ彼。

寝て起きたら仕事だ。三日後の葬儀の為に休みを取らなくては。他の人には迷惑を掛ける事になった。

俺は、寝返りを打つ。

生きて、死んで、笑って、泣いて。そういえば電話口の母は随分落ち込んでいた。もう若くは無いから、帰ったら美味しい物でも食べさせよう。

あの人は死んだ。仲が良かったはず。悲しみは無いはず。ただ、ゆるゆるとした雲のような胸の内。

葬儀は好きじゃない。

俺はぬるま湯のような布団の中で、寝返りを打つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3203p/>

死とぬるま湯の俺

2010年12月5日19時45分発行